

ルーマニア出身のドイツ語作家
ミュラーが1997年に出版した
長編小説。彼女は2009年にノ
ーベル文学賞を受賞している。

社会主義政権下のルーマニア。

語り手の「私」はアルプ少佐のど
ころに呼び出しを受けている。場
所は国家公安局だろうか。「十時
きっかり」に出頭するよう言われ
ているが、呼ばれる頻度がこのと
ころ増している。ルーマニアから
の出国を試みた、というのが容疑
の内容らしいが、アルプの言動は
尋問というより、むしろ脅しに近
い。ハンドバッグを置いてトイレ
に立ったところ、バッグのなかに
切断された誰かの指が入れてあっ
た。アルプの目的は相手を不安に
陥れ、精神的に支配することなの
か？

頭のなかで行きつ戻りつする時
間と風景。そもそも彼女はアルプ
のどこに着くまでの時間を引き

日経 2022.7.2

ヘルタ・ミュラー著

安住できない社会胸を苛む

伸ばしたくてたまらない。永遠に
着かない方がいいのかもしれない。

彼女の過去を描いていく。

路面電車は不規則に停車し、
彼女は乗客と車掌のやりとりを耳
を傾ける。眼前の光景のスケッチ
に加え、父のこと、最初の夫と義
父のこと、現在の夫、パウルのこと、
出国しようとして射殺された友人
リリーのこと、さまざまな記憶の
断片が蘇り、モザイク画のように

彼女の過去を描いていく。それにしては、なんと希望のない日々なのだろう。夫の勤める工場で横行する盗み。ズボンや靴を盗られて帰宅する夫。彼は、若くしてすでにアル中だ。社会には密告者が溢れ、信頼できる友人も隣人しい人生を送れる見込みもない。八方ふさがりのなか、「狂いたく

ない」と思うのも無理はないのだ。ふとカフカの『審判』を思い出した。主人公ヨーゼフ・Kは、ある日告発を受ける。被告として法廷に引き出され、やがて死刑執行されるが、彼の罪状はよくわからないままだ。生きていること、その社会の一員であることがすでに「罪」の一部なのだろうか。

第2次世界大戦の前半、ソ連を相手に戦った「バナート・シユヴァーベン人」(ミュラーもその一人)は、ルーマニアのマイノリティーであるだけではなく、政治的にも有罪の刻印を押された存在だったのかもしれない。けっして安住できない社会での孤立感、焦燥感、胸を苛む不安が、ミュラー一流の詩的な言葉で綴られている。

《評》ドイツ文学者 松永 美穂



(小黒康正・高村俊典訳、
三修社・3080円)

▼著者は53年ルーマニア生
まれのドイツ語作家。邦訳
書に『澱み』『狙われたキ
ツネ』『心獣』など。